



屈原の生まれ故郷が長江に沈もうとしていた。
移住政策に翻弄される人々に屈原が身を投げて訴えた浮き世への憂いを見た。

江水に消える町



長江を走るスピードボート。快適だがやはり風情には乏しい(稀帰)

今回は重慶から宜昌まで三峡を楽しみながらの船旅である。
沿岸では三峡ダムの工事も急ピッチで進められていた。宜昌の北をせき止めて建設されるこのダムは、ダム湖の長さが約600キロという巨大なものである。工事は着々と行われているものの問題はダム湖に沈む地域の住民の移住だ。対象人口は約113万人。すでに移住が終わり街が無人になったり、移住先に新しい都市が建設されたり、川沿いの風景は大きな変貌をとげようとしている。
「家が一軒一軒壊されていくのを見る



呉景生さん夫婦。生まれ故郷を離れることには感無量といふ（柳帰）

のは辛くて寂しいものです。村がなく
なり、みんなバラバラになります。先祖の
墓もある、この地に残りたい……。呉景生
さん（78）と奥さんの李孝蓮さん（73）は
小さくため息をつきながら、ポツリと
言った。最後となるみかんの収穫を終え
たら、移住地へ移るといふ。

呉さんの住む湖北省秭帰県鎮江鎮は、戦国時代の楚国の忠臣であり、詩人としても有名な屈原の故郷でもある。近くには記念館も建ち、立派な屈原の立像が長江を見下ろしている。

この付近ではどこでも移住にまつわる住民たちの不満の声を聞いた。移住プロジェクトには巨額のカネが動いており、補償金や工事費をめぐる汚職があると伝

えられている。

ある中年の男は目に涙をためながらこう言った。「私が勤めていた化学工場も水没するため、解雇されました。20年働いても退職金は1万円のみ。引越した代はひとりあたり200元。会社は10000万円もらったという話だが、労働者にカネは回ってこない。」

こんな話を聞いてると誇り高き信念の人だった屈原の故事を思い出す。

讒言ざんげんにより王の怒りを買って、失意のどん底にあった屈原は湖水の付近で老漁夫に会う。屈原は、「世を挙げて皆濁り、われ独り清すめり。衆人皆酔ひて、われ独り醒めたり」と嘆き、潔白を汚すくらいなら、川に身を投げ込んだ方がいい



奉節の船着場

野中章弘

1953年 兵庫県生まれ。アジアをフィールドに活字、写真、ビデオによるリポートを続ける。著書に「沈黙と微笑」料と絆など。早稲田大学、東京大学講師。アジアプレス代表。

と語った。

老漁師はそれを聞き、滄浪の水清まばもって吾が冠のひもを洗うべし、滄浪の水濁らば、もって吾が足を洗うべし」と歌ってこぎ去ったといふ。

汚れた水でも使い道はあるし、その中で生きるすべもある。経験豊かな漁師の言葉には、人生の知恵が匂う。ただ屈原は結局、生き方を曲げられず、自死を選ぶ。

いまこの世の中を見たら、屈原はどう思ふのかな。人間はちっとも進歩してない」と嘆くのか。それとももうそろそろ、世に合わせて賢く生きなさい、と説くのか。

そんなことをつらつら考えながら、ふと屈原の像を見上げて、心とした。顔の形相が恐ろしく険しいではないか！やはり屈原は怒っていたのである。現在の生活格差が広がる中国社会を見ていたら、無理もない。憂国の士の表情に優しさはまだまだ戻りそうもない。



移住先の子どもたち。山を切り開いて建設した団地が立ち並び（奉節）